§2. 錯体の電子状態(1)

- 1. 結晶場理論と結晶場分裂パラメータ
- 2. 分光化学系列
- 3. 多電子配置と結晶場安定化エネルギー
- 4. 様々な構造の結晶場分裂
- 5. ヤーン・テラー効果
- 6. 錯体の磁性
- 7. 配位子場理論
- 8. 角重なりモデル

結晶場理論(Crystal Field Theory)



$$E'_{Oh} = \frac{\langle \psi * | \hat{H'}_{Oh} | \psi \rangle}{\langle \psi * | \psi \rangle}$$

$$\psi = \sum c_i \phi_i$$

$$E'_{Oh} \oplus B \wedge i de x & bolowing = \sum c_i \phi_i$$

を代入し

$$\frac{\partial E'_{Oh}}{\partial c_i} = 0$$

より永年方程式を得る

の固有値問題を解く

$$(E + 4Dq)^3(E - 6Dq)^2 = 0$$

$$E = -4Dq$$
 (3重根), $6Dq$ (2重根)



分光化学系列(Spectrochemical Series)

結晶場分裂パラメータ(Δ_{o} = 10*Dq*)は電子吸収スペクトル(紫外可視吸収スペクトル)のd-d吸収帯から求 めることができ、槌田龍太郎(1903-1962)は系統的な実験により、配位子を以下の順で変化させるとd-d吸 収エネルギーが系統的に変化する、すなわち結晶場分裂(Dq)が変化することを明らかにした。 これを分光化学系列(Spectrochemical Series)という。





点群O_hの指標表

$O_k(m3m)$	E	8C,	6C,	6C4	$3C_1(=C_4^2)$	ŝ	6 <i>S</i> ₄	8.5.	30 ₁	$6\sigma_{\rm d}$		b = 48
A ₁ ,	1	1	1	1	1	1	1	1	l	1		$x^2 + y^2 + z^2$
Δ_2	1	1	-1	-1	1	1	-1	1	1	-1		
E,	2	-1	0	0	2	2	0	-1	2.	0		$(2x^2 - x^2 - y^2, x^2 - y^2)$
T _{ig}	3	0	-1	1	1	3	1	0	-1	-1	(R_x, R_y, R_y)	
Т,	3	0	1	-1	-1	3	-1	0	-1	1		(xy, yz, zx)
A1.	1	1	1	1	1	-1	-1	-1	-1	-1		
A	1	1	-1	-1	1	-1	1	-1	1	L		
E,	2	-1	U	U	2	-2	0	1	-2	0		
I'm	3	C	-1	1	-1	-3	-1	0	1	1	(x, y, z)	
T ₂₀	3	C	1	-1	-1	-3	1	0	1	-1	100253940092507	

点群Oの直積表

0	<u>A</u> ,	А,	E	T_{i}	T ₂
A_1	· A ₁	A_2	E	T_1	T_2
A_{2}	A_2	A_1	Ε	T_2	T_{i}
Ē	E	E	$A_1 + A_2 + E$	$T_1 + T_2$	$T_0 + T_0$
T_1	<i>T</i> ;	\mathcal{T}_2	$T_1 + T_2$	$A_1 + E + T_2 + T_2$	$A_2 + E + T_1 + T_2$
T_2	T_2	T_1	$T_1 + T_2$	$A_{2} + E + T_{1} + T_{2}$	$A_1 + E + T_1 + T_2$



点群Ohとその部分群の既約表現間の相関表

O_h	0	T_d	D_{4k}	D_{2d}	$C_{4\nu}$	$C_{2\nu}$	D_{3d}	D_3	C_{2h}
A_{1g}	A_1	A_1	A_{1g}	A_1	A_1	A_1	A_{1g}	A_1	A_{g}
A_{28}	A_2	A_2	B_{1g}	B_1	B_{\pm}	A_2	A_{2g}	A_2	B_g
E_{z}	Ε	Ε	$A_{1g} + B_{1g}$	A_1+B_1	A_1+B_1	$A_1 + A_2$	E_{g}	E	$A_{g}+B_{g}$
T_{1g}	T_1	T_1	$A_{2g}+E_{g}$	A_2+E	A_2+E	$A_2 + B_1 + B_2$	$A_{2g}+E_g$	A_2+E	$A_g + 2B_g$
T_{2g}	T_2	T_2	$B_{2g}+E_g$	B_2+E	B_2+E	$A_1 + B_1 + B_2$	$A_{1g}+E_g$	A_1+E	$2A_s+B_s$
A_{1g}	A_1	A_2	A_{1u}	B_1	A_2	A_2	A_{1u}	A_1	A_{α}
$A_{2\mu}$	A_2	A_1	B_{1u}	A_1	B2	A_1	A ₂₄	A_2	B_{μ}
E_{n}	Ε	E	$A_{1_{H}}+B_{1_{H}}$	A_1+B_1	$A_1 + B_1$	$A_1 + A_2$	E_{μ}	E	$A_{\mu}+B_{\mu}$
T_{1n}	T_1	T_2	$A_{2\mu}+E_{\mu}$	B_2+E	B_2+E	$A_1 + B_1 + B_2$	$A_{2\alpha}+E_{\alpha}$	$A_2 + E_u$	$A_{u}+2B_{u}$
$T_{2\alpha}$	T_2	T_1	$B_{2\mu}+E_{\mu}$	A_2+E	A_2+E	$A_2 + B_1 + B_2$	$A_{1\alpha}+E_{\alpha}$	$A_1 + E_\mu$	$2A_{g}+B_{g}$

様々な点群における軌道の既約表現

Symmetry species of orbitals on the central atom

	D _{sh}	C2+	D_{3b}	C37	D_{4a}	C ₄ ,	$D_{\rm Sh}$	C _{sv}	$D_{\epsilon_{\rm b}}$	C_{6}	T_{d}	O _h
s	Σ	A,	A'1	Α,	A.,	A,	A',	Α,	Α.,	Α.	Α.	Α.,
P.	П	B	E'	E	E.	E	E'	E,	E	E,	T.	T.
p.,	П	В,	E'	E	E_	E	E'_1	E.	E.	E.	Τ,	Т.
P.	Σ	A,	A,"	A.,	A.,	Α,	A."	A,	Δ.	A,	Τ.	T.
d_2	Σ	A,	A',	A,	A	Α,	A'	A.,	A	A.	E	E
d.2_2	Δ	A,	E'	E	B	B,	E'	E.	E.,.	E.	E	E
d_	Δ	A.,	E'	E	B	B.,	E,	E,	E.	E.	Т,	T.
d	Π	B.,	E**	E	E	E	E."	E,	E.	E.	T.	Т.
dzx	П	B,	E"	E	E	E	E''	E,	E	E,	Т,	T.,



 d^{x} イオンの O_{h} 対称強配位子場中における電子配置 $\mathcal{E}(t_{2g})^{x}(e_{g})^{y}$ 項の準位



6配位八面体型錯体の多電子系d電子配置(基底状態)



多電子系d電子配置(基底状態)

高スピン配置(弱配位子場)

低スピン配置(強配位子場)



6Dq ≥ 16Dq – P(スピン対生成エネルギー)



 $\begin{array}{c|c} \mathbf{6A_{1g}} & \mathbf{2T_{2g}} \\ LFSE = 0Dq (0.0\Delta_0) & 20Dq (2.0\Delta_0) \\ S = 5/2 & S = 1/2 \\ 2S+1 = 6 & 2S+1 = 2 \end{array} \xrightarrow{\mathbf{6Dq}} \underbrace{(t_{2g})^5} \\ \mathbf{4Dq} & \underbrace{(t_{2g})^5} \\ \mathbf{4Dq$

 $0Dq \ge 20Dq - 2P$

多電子系d電子配置(基底状態)

高スピン配置(弱配位子場)

低スピン配置(強配位子場)







4*D*q − *P* ≥ 24*D*q − 3*P*





8*Dq* − 2*P* ≥ 18*Dq* − 3*P*

多電子系d電子配置(基底状態)



Coordination Chemistry



結晶場分裂したd軌道に電子が入る場合,一般にエネルギーの低い軌道から,軌道が縮退している場合にはフントの第一 則に従ってスピン多重度が大きくなる電子配置が基底状態となる。一つの軌道に2個の電子が入る場合には強いクーロン 反発が働くためスピン対生成エネルギー(P)が必要となる。八面体形錯体ではd¹~d³及びd⁸~d⁹では電子の占め方が一通 りであるが, d⁴~d⁷では二通りの電子配置がある。不対電子の数が多くなる方を高スピン配置(High-Spin Configuration), 少なくなる方を低スピン配置(Low-Spin Configuration)という。一般に強配位子場(Dqが大きい)では低スピン配置となり,弱 配位子場(Dqが小さい)では高スピン配置となるが,具体的には,配位子や金属の種類によってDqやPが変化するため,微 妙な条件変化によって両方の電子配置をとる錯体もある(スピンクロスオーバー錯体)。四面体形錯体の場合には,結晶 場分裂パラメータ(4.45Dq)が八面体形錯体のそれ(10Dq)に比べ小さいため高スピン配置をとる。

錯体の結晶場安定化エネルギーと生成定数

結晶場安定化エネルギー

d ⁿ	金属イオン	正八面体型	のLFSE
		高スピン型	低スピン型
d 1	Ti(III)	4Dq	
d^2	Ti(II,) V(III)	8Dq	
d 3	V(II), Cr(III)	12Dq	
${\rm d}^4$	Cr(II), Mn(III)	6Dq	16Dq
d ⁵	Mn(II), Fe(III)	0Dq	20Dq
d 6	Fe(II) Co(III)	4Dq	24Dq
d 7	Co(II)	8Dq	
d ⁸	Ni(II)	12Dq	
d 9	Cu(II)	6Dq	
d 10	Zn(II)	0Dq	



 $M^{2+}(g) + 6H_2O(I) \rightarrow [M(H_2O)_6]^{2+}(aq)$ 水和エンタルピーは原子番号が増加するにつれて2つの山 を作るように変化するが、これは結晶場安定化エネルギー の寄与を示している。

Irving-Williams系列

 $\mathsf{Ba^{2+}} < \mathsf{Sr^{2+}} < \mathsf{Ca^{2+}} < \mathsf{Mg^{2+}} < \mathsf{Mn^{2+}} < \mathsf{Fe^{2+}} < \mathsf{Co^{2+}} < \mathsf{Ni^{2+}} < \mathsf{Cu^{2+}} > \mathsf{Zn^{2+}} > \mathsf{Zn^{2+}} < \mathsf{Ni^{2+}} < \mathsf{Cu^{2+}} > \mathsf{Zn^{2+}} > \mathsf{Z$

錯体の生成定数 log K_Iは配位子の種類には鈍感で、概ねこのような順(Irving-Williams系列)となるが、これは結晶 場安定化エネルギーの効果が加わったためと考えられる。Ni(II)とCu(II)の順が逆転しているのは、Cu(II)のJahn-Teller歪による安定化効果が付加されたためである。

様々な構造での結晶場分裂









八面体形錯体では、高スピン型d⁴ (Mn(III), Cr(II)), 低スピンd⁷ (Ni(III), Co(II)), d⁹ (Cu(II), Ag(II))錯体は基底状態の電子配置が縮退しているため、その縮退を解消するように分子が歪んでエネルギーを低くする。これをヤーン・テラー効果(Jahn-Teller Effect)による歪という。d⁹ Cu(II)錯体の場合、基底状態の電子配置はeg軌道に関し縮退しており、 d_{22} 方向に伸長するか、 d_{x2-y2} 方向に広がることで縮退を解き安定化エネルギーを得る。eg軌道は配位子方向に張り出しているためヤーン・テラー効果は大きいが、 t_{2g} 軌道は配位子間に広がっているため、 t_{2g} 軌道に基づくヤーン・テラー効果は小さい。また、四面体錯体ではヤーン・テラー効果による歪はほとんど見られない。静的な歪ではなくヤーン・テラー効果による歪が動的な場合もある(動的ヤーン・テラー効果)。

錯体の磁性

錯体の電子配置,特に不対電子の数を決定するには磁気モーメント(磁化率)の測定が有効である。物 質を磁場(H)中におくと物質には磁化(M)が生じる。磁場から反発を受ける磁化が発生する場合,反磁性 (diamagnetism),磁場に引き込まれる場合,常磁性(paramagnetism)という。錯体の場合,不対d電子の 寄与のみから発生するスピンオンリー常磁性を示す場合が多い。全スピン量子数がS(不対d電子の数 がN個)の錯体のスピンオンリーの磁気モーメントμ_{so}は以下の式で表される。

$$\mu_{so} = 2\sqrt{S(S+1)} = \sqrt{N(N+2)}$$
 (B.M.)

B.M. (ボーア磁子) =
$$\mu_{\rm B} = eh/4\pi m_{\rm e} = 9.274 \text{ x } 10^{-24} \text{ JT}^{-1}$$

$$\mu_{\rm eff} = \sqrt{\frac{3 k \chi_{\rm M} T}{N \mu_{\rm B}^2}} \quad (B.M.) = 2.828 \sqrt{x_M T}$$

 $\chi=M/H$ を磁化率といい、磁気天秤を用いて実際に測定することができる。 χ_M (モル磁化率)は以下の式 で表され、有効磁気モーメント(μ_{eff})を決定することができる。錯体の場合、このようにして求められた有 効磁気モーメント μ_{eff})とスピンオンリーの磁気モーメント(μ_{so})はかなり近く、磁化率の測定により不対電 子の数を求め、基底状態の電子配置を決定することができる。

注)低スピン型3d⁵錯体と高スピン型の3d⁶及び3d⁷錯体では常磁性に対して軌道角運動量からの寄与 があるためスピンのみによる値からのずれが大きい場合がある(基底状態がT項の錯体は基本的にス ピン軌道相互作用があるので注意を要する)。

配位子場理論(Ligand Field Theory)

●中心金属イオンの原子価軌道と配位供与原子の軌道との相互作用を分子軌道法を 持ちて考察する。

●中心金属の原子価軌道にはnd軌道, (n+1)s軌道, (n+1)p軌道を考える。

●供与原子の軌道は, σ軌道とπ軌道に大別し, 配位子の対称性(点群)に応じた<mark>群軌</mark> 道(LGO)を考える(対称適合線形結合SALC)。

●金属イオンと配位子の軌道の相互作用は分子積分等(<φ_i|Ĥ|φ_j>, <φ_i|φ_j>)により計算 されるが, 点群の規約表現を用いた対称適合則を利用しインターラクションダイアグラ ムを作成すると便利。

八面体形錯体(On対称)における金属の原子価軌道との供与配位 子の群軌道との相互作用

シュライバーの付録参照



配位子から金属へのσ供与



正四面体型錯体(T_d)の分子軌道

平面四角形錯体(D_{4h})の分子軌道



9、10族の強い配位子場のd⁸金属の場合、平面四角 形錯体を形成し 16電子となる場合が多い。



四角錐型錯体 $ML_5(C_{4v})$ の分子軌道 三方両錐型錯体 $ML_5(D_{3h})$ の分子軌道





 $L = CO, CNR, PR_3$

t_{2g}軌道はπ供与性配位子で 不安定化する(Δの減少)

t₂₀(n)は配 位子のπ軌

道(π供与)

する

で不安定化

π軌道

t_{2g}

eg

 \mathbf{L}^{Z}

t1u

х К

^a1g

 $L = OH^{-}, Cl^{-}, O^{2-}, OH_{2}$





角重なりモデル(Angular Overlap Model)



$E = <\phi_{i}|H|\phi_{j}> \sim S_{ij}^{2} = e_{\lambda}\Theta_{ij}^{2}, \ (S_{ij} = <\phi_{i}|\phi_{j}>, \Theta_{ij} = <Y_{i}|Y_{j}>)$

L position d_{z^2} $d_{x^2 - y^2}$ d_{xy} d_{xz} d_{yz} d_{z^2} $d_{x^2 - y^2}$ d_{xy} d_{xz} d_{yz} 110000001121/43/4000011031/43/40000101041/43/40000110051/43/4000011006100000110061000001107001/31/31/32/32/32/92/92/98001/31/31/32/32/32/92/92/991/21/21/21/22/32/32/92/91/9			σinteraction in e	5 π	interaction i	n e _n	
1 1 0 0 0 0 0 1 1 2 1/4 3/4 0 0 0 0 1 1 0 3 1/4 3/4 0 0 0 0 1 1 0 4 1/4 3/4 0 0 0 0 1 1 0 5 1/4 3/4 0 0 0 0 1 1 0 6 1/4 3/4 0 0 0 0 1 1 0 6 1/4 3/4 0 0 0 0 1 0 1 6 1/4 3/4 0 0 0 0 1 0 1 7 0 0 1/3 1/3 2/3 2/3 2/9 2/9 2/9 逆 逆 逆供与(-e_n)を 8 0 0 1/3 1/3 2/3 2/3 2/9 2/9 2/9 約 的に見積もる <	L posit	tion d _{z²}	$d_{z^2} d_{x^2-y^2} d_{xy} d_{xz}$	d_{yz} d_{z^2}	$d_{x^2-y^2} \ d_{xy}$	$d_{xz}^{} d_{yz}^{}$	
9 0 0 1/3 1/3 1/3 2/3 2/3 2/9 2/9 2/9 できる。 10 0 0 1/3 1/3 1/3 2/3 2/3 2/9 2/9 2/9 11 1/4 3/16 9/16 0 0 0 3/4 1/4 1/4 3/4	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11	1 1/2 1/2 1/2 1/2 1 0 0 0 0 0 0 0 1/2	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0 0 0 1 0 1 0 1 0 1 0 0 2/3 2/9 2/3 2/9 2/3 2/9 2/3 2/9 2/3 2/9 2/3 2/9 2/3 2/9 3/4 1/4	1 1 1 0 0 1 1 0 0 1 1 1 2/9 2/9 2/9 2/9 2/9 2/9 2/9 2/9 2/9 2/9 1/4 3/4	 ●MO法を簡略化したような手法 ● σ供与(e_σ)だけでなく, π供与(e_π)やπ 逆供与(-e_π)を定性的に見積もることができる。



Angular Overlap Modelによるd軌道の分裂





様々な構造の錯体のAOMによるd軌道の分裂

配位子のσ供与とπ供与を考慮した場合





§2. 錯体の電子状態(2)

- 9. 錯体の電子吸収スペクトル
- 10. 多電子系電子配置 LS結合
- 11. Orgaelダイアグラム
- 12. Tanabe-Suganoダイアグラム
- 13. 電荷移動吸収
- 14. 錯体の発光